

白頭山に陽は落ちて  
—忘れ得ぬ日々の記録—

宮城県 今野素夫

一 白頭山に陽は落ちて

(一) ソ連参戦

昭和二十(一九四五)年八月九日、ソ連は日ソ中立条約を一方的に破棄して、国境を越えて怒涛のごとく南下侵攻してきた。

同年四月、私は羅津国民学校を卒業、作文と口頭試問、身体検査を受けて羅津中学に入学した。

入学後は夢中で勉学に励んだが、やがて勤労動員

が始まって、手に持つペンはツルハシとスコップに代わった。雨の日以外は防空壕掘りと畑の開墾、松の根掘りの作業と、週に二、三時間軍事教練で敬礼の練習や分列行進、軍歌演習、軍人勅諭の暗唱など、幼年期から天皇を中心とした軍国主義はさらに深く細胞の隅々まで刷り込まれた。

中学生になって一カ月、余裕が出てきた私は高い丘にきてみた。鈴蘭が群生し、香りが辺りに充滿していた。近くの女学校から、ショパンの「別れの曲」が流れ、私はロマンと哀愁のひとつときに浸った。

「天佑ヲ保有シ……」天皇の開戦詔勅である。羅津駅では、毎日のように出征兵士が見送られた。

羅津中学からも、海軍、陸軍の学校に行く人たちが学校を去って行った。私も、仙台の陸軍幼年学校を受験しようと思っていた、軍国少年の一人だった。

八月九日早朝、羅津の市民は、金属音を唸らせて飛び交う戦闘機と、爆弾の炸裂音に肝を冷やした。翼の赤い星マークで、ソ連の戦闘機だと分かった。ソ連の宣戦である。父母と姉そして妹二人の私たち六人家族は、防空壕で空襲の終わるのを待つ夜を過ごした。

(二) 瓦礫の羅津

学生には夏休みはなかった。登校時、大和ホテルの裏の大邸宅が爆弾の直撃を受け、近くの家の壁などに人間の黒い肉片がこびり付いているのを見た。生まれて初めて見る修羅場だった。「これが戦争だ！」父が言った。「大和ホテルが危ない。お前たちは山の方に避難しなさい」私たちはお握りと水を持って家を出た。家から百メートルも歩かないうちに、またもソ連機が襲来した。とつさに

無蓋の防空壕にみんなが飛び込むと同時に、はらわたが飛び出るようなものすごい炸裂音が響き、土砂がばらばらと落ちてきた。父が言った通りだった。瓦礫の山を避けながら我が家の防空壕に帰り、一夜を過ごした。

翌日、我が家の防空壕のすぐ先に、爆弾の炸裂した大きな穴が開いていた。大和ホテルの窓は吹っ飛び、コンクリートの壁には無数の爆弾の破片がささり、白亜のホテルはもうそこにはなかった。我が家も滅茶苦茶だった。

(三) さらに羅津

この爆弾で、近くに住んでいた友人のK君のお兄さんが即死した。父は、かろうじて防空壕に飛び込んだということだった。「羅津の市民は、直ちに鉄柱洞テツチウドウを抜け会寧方面へ避難せよ！」全市民に府庁から通達があったのは、午後八時ころだった。雄基方面の人たちが、羅津を通過して行った。みんな恐怖で顔が引きつっていた。

私たち家族六人は、隣組の人と一緒に二十人ぐ

らしい集団となって、羅津神社の近くにある官舎に避難した。途中二、三回ソ連機の襲来を受けた。そのたびにトウモロコシ畑に身を隠したが、ソ連機は逃げまじう私たちを容赦なく撃ち殺した。「うっ！」という声を聞いた。私は、声の方を見たとき頭から鮮血が飛び散るのを目撃した。頭がなかった。即死である。遺体はそのままにして、生きている人だけが逃げた。泣き叫ぶ子供、女の悲鳴、叱咤する男の怒声、この地獄の様相は私の脳裏に焼きついた。「これは戦争ではない。屠殺だ！」

空襲が止んだ。父と姉が家に衣料、食料などを取りに行くといつて、山を降りて行った。妹二人は隣組の人たちと先に雄羅トンネルに向かった。私と母は、父と姉が戻って来るのを待った。家族は三つに分かれた。戦場で家族がばらばらになることは、一生会えなくなることも気が付かないほど錯乱していた。

私たちが避難している官舎にも、爆弾が投下さ

れた。もう父と姉を待つことはできなかった。私と母は、父と姉のリュックサックを自分のリュックサックに乗せて羅津神社の坂道を登ったが、真夏の太陽のもと、荷物の重さに耐えられず父と姉の分を神社の陰に隠した。

突然一機のソ連機が私と母の真上に襲来し、母と私を狙って機銃を掃射した。二人は登ってきた坂を転げ落ちた。弾は土埃をたて一直線に土に刺さって、危うくミシンで縫われるところだった。敵機が去って立ち上がったとき、妹二人が反対の坂を登って来たのに出会った。

羅津中学の前を通り軍馬補充部からは、もう市街地である。日本軍の建物に朝鮮人の一団が殺到し、毛布や衣類、食料を盗み出していった。「お前ら何をしているのだ！ぶった切るぞ！」と馬に乗った将校が、怒鳴って軍刀を振り上げた。兵隊たちはもうそこにはいなかった。

やがて夜になった。私たち四人は朝食を摂った後水を飲んだだけだが、別に空腹だとは思わな

った。母は、同じ町内の人にお握りを二個もらって四人で分けて食べ、そのまま野宿した。この先どんな運命が待っているとも知らず、夜露に濡れながらぐっすり眠った。

朝の寒気と、人々のざわつく気配で目を覚ました。服は夜露でびっしょり濡れていた。みんなの後について山に登り、その頂上から羅津湾の大草島、子草島が遠望され、修羅場だった羅津の街のあちらこちらに数条の黒い煙が立ち昇っているのが見えた。「私たちの故郷、羅津よ、さようなら！」私たちは踵かかとを返して山を下った。

#### 四 流浪の難民

関係者の情報によると、羅津はソ連軍が上陸して日本軍と激しい戦闘が続いているという。「本当に戦っているのかな？」子供心に疑問をもったが、私たちは会寧への道を目指した。そのころになると、集団で歩いてきた一団は個人、家族の単位になっていた。前後にだれもないので、自分たちの家族だけが取り残されたような恐怖感と孤

独感に襲われ、会寧への道を懸命に歩いた。私は途中、だれかが捨てて行った鉄兜を拾った。その鉄兜に米と水を入れ、研ぎもせずにご飯を炊いた。久しぶりの炊きたたのご飯は、塩をかけただけで美味しかった。追い越して行く兵隊から米や乾パン、塩をもらい、自分の食糧確保はできた。山奥のどこか分からない所で野宿した。

出発しようとしたとき、やってきた一団の避難民の中に、羅津で別れた姉がリュックサックを背負って歩いているのを見つけた。母は父のことを聞いた。「後から来るって」父は荷物をリヤカーに積んで姉と一緒に運んでいたが、途中山道を登り切れず、大きな荷物を穴を掘って埋めてから追いかけるということだった。私たち五人は父の来るのを待つことにした。私が拾った例の鉄兜で、近くのたまり水を汲み、研ぎもせず飯を炊き、缶詰を開けて五人で食べた。父は二時間経っても来ない。私たちは、いたたまれず出発した。

#### 五 少年の疑問

山に登り、溪谷も渡った。大きな川を渡るとき、母は一番下の妹をリュックサックの上に背負い、腰まで水に漬かりながら渡った。すぐ下の妹は姉と私がかばいながら渡った。夜は、木の下や橋の下で夜露をしのいで野宿をした。何のために歩くのか？ じつとしていられない恐怖感からか？ もはや、無機質で機械的な感覚が私たちを動かしていた。

#### (六) 会寧―古茂山―茂山

やがて食糧が底を突いてきた。優しかった母が、日一日と鬼女の顔になっていくように私には感じられた。母と私は朝鮮人の畑に忍び込み、大根、にんじん、トウモロコシなどを盗み、それを五人で生のまま食べて飢えをしのいだ。飢えをしのぐためのこの行為は、当分続いた。

木造の橋を渡ると、やがて会寧の街に近付いた。街は無人の街で、焼け野原だった。会寧に集結した日本人たちは、満鉄經由で満州の凶們―延吉―吉林へと出発したあとだった。私たちは、他の避

難民からかなり遅れてきたようだった。あちらこちらの道路の壁や電柱に、張り紙が貼られていた。「〇〇さん、延吉で待っています」「羅津組は茂山に集合せよ」

私たちは疲労困憊して、空き家になった官舎でしばらく休んだ。官舎の裏で小さな倉庫を見付け中に入ってみると、土間に米がこぼれていた。米をかき集めてみると、土間の砂混じりだが五升ぐらいあった。二日ぶりのご飯は例の鉄兜で炊いて食べた。がりがり砂が混じっていたのには閉口したが、そのまま一緒に飲み込んだ。食事が済むとまた歩いた。

炭鉱会社の社宅の人たちが、トラックを調達して乗り込んでいのに行き会った。リーダーの中年男性以外は、ほとんど婦女子である。私たち五人も、その集団に紛れ込んで乗せてもらった。約五キロメートルくらい走った所でとがめられた。

「部外者が乗っている」「ずるい奴らだ。すぐ降りろ！」リーダーの男は叫んだ。母は懸命に頼んだ

が、私たち五人は無理矢理降ろされた。乾いた土埃を残してトラックは無情に走り去った。五人はまた歩いた。皆自分が生きることへの執念で懸命なのだ。無情な言葉に腹を立てたが、仕方がなかった。究極の人間性は、所詮「エゴイズム」なのだから……。

朝鮮人に「牛小屋でいいから泊めてくれ」と頼み牛小屋の藁をかぶって寝たり、無人の炭焼き小屋で仮眠するなど、流浪の逃避行はどんなつらいことでも耐えることである。途中、列車にも乗れず軍隊からも見捨てられた同じ姿の避難民に出会った。婦女子、老人で、どこで調達したのか南京袋を上手に服に仕立てて着ていた。山の中で産気づいて生み落とした、糸のようにやせた乳飲み子を抱いている若い母親もあり、哀れさを感じた。

難民の一行は、古茂山から一路南下し清津を経由して元山を目指す計画という。私たちは父に会えるのを期待して、満州への支線がある茂山へと北上するため、皆と別れた。「さようなら、さようなら、

ら、日本で会いましょうね！」

朝鮮の農家には親切な人もいた。「アイゴ―、難儀をしているのだろう、かわいそうに！」私たち五人のために、オンドル付きの部屋を空けて、食事をさせ泊めてくれた。母の流ちょうな朝鮮語が、相互理解に役立つたかもしれない。

だれもない山道を歩いていとき、一羽の鶏がいた。家族五人は両手を広げ取り囲んで、母が捕まえた。母の鬼女の形相は本物になった。首をひねって殺し、下ごしらえをして焼き、五人で食べた。しばらくぶりのタンパク質のご馳走に、五人は満足して舌つづみを打った。

茂山の街に入ったとき、朝鮮人の態度や様子が何となくおかしい。日の丸の半分を青く塗りつぶした、見慣れない旗がなびいていた。

#### (七) 日本敗戦

「多くの日本人が列車で満州へ行った」「ソ連の爆弾で多くの日本人が死んだ」「日本はアメリカに無条件降伏した。広島と長崎に新型爆弾が落

とされ、三十万人がいつぺんに死んだ」こんな話を朝鮮人が教えてくれた。信じられない話だった。新型爆弾とは何だろうか？ 本土決戦は？ 天佑は？ 国はこの責任をどう取るのか？ 頭の中は、疑問の渦に巻き込まれた。明治新政府が発足以来明治、大正、昭和と八十年も経たないで崩壊するのは、何か根本的に間違いがあったのだろうか？ 私たちは、この先苦難が待ち受けているのも知らず、失意のうちに延社に向かった。

(八) 延社で父に会う

延社の街は白岩につながっており、私たちは鉄道線路沿いに街に入った。延社の街に入る前に、同級生のK君とその家族に出会った。K君のお兄さんは、羅津爆撃の際、爆弾の破片に直撃され即死したのは前にも述べたが、遺体はそのままにできたので羅津に戻ると言う。「元気で、さようなら」「君も元気で、また会おう！」K君一家は、来た道を羅津へと戻って行った。

南へ行く人、北へ行く人、羅津に戻る人、どこ

軍のトラックが来る。橋の下に隠れなさい！」私たちは橋の下の土手を転げ落ちるように隠れ、ソ連軍のトラックが過ぎ去るのをじっと待った。トラックは十台ほどだったが、待つ時間は長かった。軍国少年の誇りはガラガラと崩れ落ち、悔し涙が頬を伝った。羅津中学校の記章の付いた戦闘帽を川に捨てた。私はこの瞬間、軍国少年をやめた。

(九) 白頭山に陽は落ちて

途方に暮れていた私たち家族を助けてくれたのは朝鮮人の医者、安さんだった。注射を二本打ってくれ、掛け布団一枚と鍋一個もくれ、日本人が経営していた旅館の一室をあてがってくれた。父は懸命に病氣と闘い、母も懸命に看病をした。私は薪を探し、姉は食糧を調達した。姉も私も妹も、この一カ月の間にたくましくなっていた。主食は高粱と粟のお粥、ジャガイモ、トウモロコシなどがおかずだった。母は父にお粥を食べさせた。私たちは部屋を別にした。父は血便を垂れ流して部屋中をのたうち回り、苦痛のうめき声をあげた。

へ行っても無限地獄が待っている。近所に住んでいた横田さんが、私の母を見つけ走って来た。「今野さん！ ご主人が倒れて動けなくなっているよ！」母はその場所を聞くやいなや、私をせかして駆けつけた。父は夏服に母の着物をかぶり、羅津から離さず持っていた日本刀にすがって立っていた。私と母を見ると、父は腰が砕け立ち上げられなかった。母と二人で、やっと駅前の事務所のよいうな所に連れてきて寝かせた。父の痛みに耐える顔は悲痛そのものだった。難民は、逐次北へ南へと出立して行った。二、三日のうちに、私たち家族六人が取り残された。「羅津へ戻ろう」父は言った。私は町で見つけた担架に父を寝かせ、母が前を、姉と私が後ろを持ってみた。父はやせ型だが重く、羅津まで行くのは不可能だった。父は渾身の力を振り絞って立ち上がり、母と姉、私たちに支えられて歩いたが、しよせん女、子供である。遅々として歩むことはできなかった。橋の手前に来たとき、朝鮮人の年配者が慌てて叫んだ。「ソ連

私は山で鉈を拾い、後々役に立った。

父は一週間ほど苦しんだ朝急に立ち上がり、私たちの部屋に来て叫んだ。「もう治った。さあ日本に帰ろう！」父は四股を踏んで、歩けることを私たちに見せたが、その途端どろりと倒れてそのまま昏睡状態に陥った。

朝方、うとうとしていたとき、「父さんが死んでしまった」母が力なくぼつりと言う声で目が覚めた。昭和二十年九月六日の朝だった。「母さんすまなかつたな」父は最後に母に向かって言ったという。私たちは皆、話をする元気もなかった。私は鉄兜と安さんからもらった鍋でお湯を沸かし、母と姉は父の体をきれいに拭いた。血便がこびり付いたオンドルの部屋も、きれいにぞうきんがけをした。母は朝鮮人に作ってもらった棺に父を納め、父が離さず持っていた日本刀を胸に持たせた。あれほど苦痛にさいなまれた父の死に顔は、穏やかだった。

翌朝、大八車に乗せて、保安隊に指定された埋

葬場所の山の斜面まで行つた。墓穴はできる限り深く掘り、棺を縄で吊り降ろした。「父さん、さようなら！」五人で静かに、そして黙々と土をかけ、土饅頭を作り上げた。朝鮮を愛していた父は、この土になつた。

父の埋葬を終わり山を降りるとき、夕焼けがオレンジ色に染まり、雪をかぶつた白頭山に映えて美しかった。羅津の鈴蘭の丘で聞いたシヨパンの「別れの曲」が私の心に響き渡り、あたかも父に対する葬送曲のように木霊した。

#### (十) 難民生活の始まり

滞在していた旅館に、十八歳ぐらいの日本人の女を背負つた中国人が、何やらわめきながらその女を床に降ろしていった。その女性はリュックサック一つを持っていたが、瀕死の状態だった。ひと晩苦痛のうなり声をあげていたが、そのうち静かになつた。翌朝母と見に行つたら、既に死んでいた。遺体は大八車に乗せて埋葬所に埋葬した。

父が死んで三日目、川から拾つてきた大きい石

ムニダ(すみません)「アーニ、ケンチャナヨ(構わない)朝鮮人は二十五、六歳の青年で、私たちに好意的なので安心した。「ここは寒い。家に来なさい」私たちは、その青年に付いて行つた。青年の母親に麦飯をご馳走になり、住居など何かと心配してくれる親切な朝鮮人だった。家の前に五メートル四方ぐらいの物置小屋があり、私たちはそこに落ち着いた。一応オンドルになつており、この冬をここで越すことになつた。

#### (二) 越冬

燃料と食糧さえあれば、何とか冬を越すことができる。母と姉は食糧を調達し、高粱、粟、ジャガイモなどを売っている所を探し、リュックサックいっぱい背負ってくる。お金は結構持っていたし、まだ日本円は流通していた。

私は山を歩き燃料を集めた。家の前に一家の便所も作つた。北朝鮮白頭山の麓、延社の冬は氷点下三十度の寒さである。草木は凍り、水も空気も発する言葉さえも凍り付いた。懸命に集めた薪は

を父の墓まで運び、土饅頭の上に置いた。母と私は、父の土饅頭の前で手を合わせた。今日も夕日が白い雪をかぶつた白頭山の稜線に沈んで、空は茜色に染まっていた。

#### 二 国敗れて山河なし

#### (一) 親切な朝鮮人

父の死後、私たちは滞在していた旅館を強制的に退去させられた。今後、私たちは風の吹くまま、水の流れるままに生きていくしかなかった。その夜は、見付けた牛小屋で、五人が体を寄せ合い寝ることにした。体を寄せ合つて温まってくると、羅津を出て以来着替えたことのない下着に住み着いた風が、人間の血を吸い始めてかゆい。牛糞の匂いが目と鼻に染みついて、眠るどころではなかつた。人間が耐えられる限界であろう。これが惨めな難民生活の始まりだった。

朝、目が覚めると、牛の飼い主が目の前に立っていた。「イルボン、サラメ? (日本人か)」母はいきさつを説明して青年の了解を得た。「ミアナ

オンドルで赤々と燃え、赤い炎は心を落ち着かせ、ひとときの安らぎを感じさせた。

食糧が切れると、母と私は掘り残しのジャガイモや大豆を、リュックサックいっぱいになるまで拾つて歩いた。大きなジャガイモやカボチャを見付けたときは、母と歓声をあげた。これが私たちの命をつないだ。

私たちはこの半年の間、すさまじいばかりの運命の激変を体験しながら、その変化に否応なく順応させられ、懸命に我慢をしてきた。私たちは、寒さと空腹を抱え、食べること以外は喜怒哀楽のない世界をさまよいつつ、冬を越した。やがて一日と日差しの暖かさを感じ、木の芽が吹き出し、私たちは凍死と餓死を免れた。

羅津から履き続けてきた靴はぱっくりと破れてしまい、母がボロ布で作つた草履を履き、食べ物を探して街をほつき回つた。

#### (三) スターリンの行進

延社の街にソ連の軍隊が進駐し、ソ連軍兵士は

「マンドリン」と呼ばれる自動小銃を肩から逆さに吊して徘徊して、何となく街が騒然としていた。朝鮮人たちの間にも、殺気じみた様子が感じられた。「スターリン大元帥！ ウラー！ ウラー！」

「キム・イルソン將軍！ マンセー マンセー！」

私たちが住んでいる小屋から見上げる道路にも、スターリンの肖像画を掲げた行進が、長い列を作って通り過ぎる。

イルジョンサンスクラムヨン

終戦によって、「日帝三十六年植民地支配」から解放され、植民地圧政への恨みと怒りは、私たち日本人避難民にその矛先が向けられた。私は行列が通るたびに、好奇心も手伝って表で見ていた。行列が小屋の前で止まり、「イルボン、サラメ、カゲラ（日本人は出て行け）」突然石のつぶてが雨のように飛んできた。ソ連機の機銃掃射以来の恐怖だった。私は瞬間身を隠したが、石の一個が私の額に当たり激痛を感じ、一筋の血が頬を伝わった。悔し涙が血と一緒に流れ、目の前にあった木にすがって泣き、民族の違いを強く感じた。

じけて私の体が貫かれるような恐怖におののいた。私は手首から時計を外し、背の高い鬼のような顔をしたソ連兵に渡した。「ハラシヨ、ハラシヨー！（よし、よし）」と言って帰って行った。私は悔しきで体が震えるのを感じ、「敗戦国」の屈辱をいやというほど味わった。万年筆と時計を取られた私は、羅津中学生としての誇りも奪われた。少年の胸に描いていた誇りは、一つ、また一つと砂上の楼閣のように、吹きまくった屈辱の嵐によって跡形もなく崩れ去った。

#### (五) チョップパリ

北朝鮮は騎馬民族であり、蹄の割れていない馬を大事にし、蹄が割れている牛や豚は下等な動物（チョップパリ）とさげすんでいる。足袋や地下足袋を履く日本人に対しての、侮辱語である。朝鮮人は私たちの住んでいる小屋に毎晩のようにやってきて、スターリンや金日成の偉大さを自慢げに話し、日帝三十六年の植民地迫害と略奪について、恨みと怒りをぶつけて帰る。帰り際「チョップ

#### (四) 中学生の誇り

日本人の女がいるのを聞きつけたソ連兵が、時々侵入した。姉と母が狙われたが、そのたびに辛くも難を逃れたのは幸いだった。ある夕方、私と妹がオンドルの火を燃しているとき、ソ連兵二人が近づいてきた。妹が「ワーワー」と騒いでソ連兵が来たことを知らせた。母と姉は裸足のまま素早く逃げて、いつもの通りオモニの家に避難をした。私は、背の高い鬼のような顔をしたソ連兵の前に立ちふさがった。妹もけなげにも私と並んで兵士の進路に立ちはだかった。「ヤボンスキー、マダム、ダワイ！（日本人の女を出せ！）」甲高いソ連兵の声は、今でも耳に残っている。肩から吊したマンドリン自動小銃の筒先で、私と妹の胸の辺りをグリグリと小突き回し、私は胸のポケットに挿していた万年筆を取り上げられた。私が羅津中学に入学したとき買ってもらったものである。「シゲ、ダワイ！（腕時計をよこせ）」マンドリンでさらに私を小突き回し、銃口から今にも弾がは

り！」と、必ず捨てずりふを浴びせた。私たちが反発せず恭順の意を表したので、反動分子でないことが分かったのか、だんだんと彼らの敵愾心は薄らいできた。

私は、スターリンの肖像画を画いて小屋の壁に貼った。よく似ていると自画自賛していた。保安隊が、旧日本軍の歩兵銃を持ち日本兵の服装で、ときどき私たちを監視に来ていたが、スターリンの肖像画を見て「だれが書いたのか？」と恐ろしい顔で聞き、私は隊の事務所に行行された。母と一緒に来てくれたが、私が尋問されている部屋には入れなかった。「スターリン大元帥に無礼である」といって三八銃の台尻で背中を二回たたかれた。目が飛び出るくらい痛く、私は悲鳴をあげた。今でもその痛さは背中に残っている。

#### (六) 営林署にて

昭和二十一年五月、母は延社営林署での仕事を探してきた。十五歳以上ならば、仕事にありつけるとのこと。私は母と早速応募して、その日から

働き始めた。杉の苗畑で十センチメートルくらいに伸びた苗を選び、籠に詰め込む仕事だった。朝八時から始め午後五時に終了、日給は二人で二十円だった。疲れた体を引きずって、妹たちが待っている小屋に帰った。二日目は、前日杉の苗を詰め込んだ籠を背負って、山の中腹まで運ぶ仕事だった。午前中に二回、午後から三回往復する。肩がビリビリ痛かった。三日目、山の斜面に杉の苗を植える。山の斜面を何回も往復して苗を運ぶ。これが難仕事で、十四歳の私はかなり疲れた。この仕事の繰り返しで一日が終わる。朝鮮人に混じって仕事をしているうちに、私は自然に朝鮮語を覚え、少しずつ話せるようになり母の通訳も要らなくなった。私が草履を履いているのを営林署員が見て、ゴム長靴を持って来て、「履いてみる、チヨッパリ！」草履をポケットにしまい、ゴム長靴を履いて仕事を続けた。営林署の仕事は八月に入って終わった。

#### (七) ソ連将校の来訪

うな日本語でロシア語を翻訳した。「私は日本の婦人と結婚したいと思っている。家族もウクライナに連れて行く。姉と結婚したいと思っている」部屋にこもった油煙は、互いの顔さえ見えなくらいだった。ソ連の将校は、話し終わると早々に引き揚げた。しかし、その話はいつの間にか立ち消えになった。私たちの髪はぼうぼう、顔は煤だらけ、体から発散する難民独特の臭気に驚いたのかもしれない。

姉は両班シバンの家に飯炊き女中として働くことになった。十一歳になった妹も、同じ家に子守りとして働くことになった。母と私は食糧を求めて歩き回り、街から大分離れた中国人の農家に入って行った。カボチャが畑に捨てるように転がっていたので、それをもらえないかと思った。「日本人の親子か」人の良さそうな中年の中国人が、にこにこして出てきた。母は朝鮮語で、「あのカボチャをもらいたい」と言った。「構わない」と言ってくれた。私と母お礼を言つて帰ろうとした。「ちよつと待

羅津の我が家を離れて一年が過ぎた。草の葉やドングリなどの木の実、山菜などを母が上手に料理した。雑草のアカザやオオバコを、クルミであえたのが美味しかった。毎日食べていたせいか、五人とも顔がむくんできた。アカザに毒性があり、顔のむくみはしばらく取れなかった。夜は山で採ってきた松の根を燃やして明かりを取るの、油煙が小屋に充満し、顔や髪の毛は煤でどす黒く鈍った顔になった。その上私たちは垢だらけで、衣服に着いた虱や南京虫に刺され、爪で搔いたあとが化膿し、全身にかさぶたができて、独特な臭気を放った。こんな乞食よりひどい生活にも辛抱強く耐えていた。

延社の保安隊から、通訳を連れたソ連軍の将校の来訪があるという連絡があり、私たちは何事かと緊張した。松の根を燃やし明かりを取るころにやってきたソ連軍の将校は、話し始めた。「私は赤軍中尉である。故郷はウクライナで、両親が大きな牧場を経営している」通訳の朝鮮人は、流ちょう

で、お前たちはどこからきたのか。茶でも飲んで少し話して行け」中国人は裏から麦や粟の入った袋を持って来て、「これを持って行け」と袋ごとくられた。

#### (八) 母の再婚話

九月も終わり、極寒の冬が近付いてきた。私と母は、ときどき親切な中国人の家に寄っては食糧をもらった。そして燃料にする雑木を集めるなど越冬の準備が始まる。私はこのとき左親指の先から一センチメートルほどを、思い切って振り下ろした鉦で切り落としてしまった。一瞬、切り落とした指先を拾って土を払い、切り口に押し付けた。完全に切り離された指先がうまく癒着するか、不安が脳裏をかすめた。指先を押しさえたまま、鉦を腰に挿し小屋に戻った。切り口を布きれでくるんだが、激痛が走り、その夜は眠れなかった。薬もなく、もちろん診てもらおう医者もいない。指先の出血はなかなか止まらなかった。

ときどき食糧をもらった親切な中国人が母の再

婚話を持ってきたのは、私の指の傷がやつと治るころだった。「仲間に妻を亡くした者がいる。再婚しないか？」親切な中国人は熱心に母に再婚を勧めたが、母は即座に断った。しかし、この冬を乗り越せるだろうか？ 白頭山麓の冬の厳しさは、前年の経験で身にしみている。衣料、食糧、住居はあまりにも貧弱である。一回目の越冬は、日本円も流通しており体力もまだ余裕があったが、今、母、姉、妹そして私も栄養失調で、二回目の越冬が果たして可能だろうか？ 子供たちは母の気持ちをうかがっていた。

十一月に入り、氷点下の毎日が続いた。ときどき食糧をもらいに行く中国人は、根気強く母を説得していた。「やっぱり再婚がいいよ……」私たちは確かに栄養失調でやせこけ、力もなくふらふらと歩いていた。この調子では家族みんなで餓死するか、体力が尽きて凍死するかどうかもしれない。その夜、子供たち四人の前で母は話した。「母さんは、五人が生きていくために、中国人の後家

を希望する中国人を紹介し、私たちはその人が住んでいる家のオンドルの燃えている部屋に落ち着いた。六畳くらいのオンドルの部屋には大きな台所もあって、人間らしい生活ができる環境は整っていた。

しかし、事件は次の日の夜起こった。中国人がわめき、怒り狂い、暴れていた。母が決心を翻し、農夫の妻になることを拒否したのだ。中国人は先の尖った農機具を振り回し、狂気のように襲いかかってきた。妹二人を逃がし、私は手許にあった長い棒を持って立ち向かい、母を護った。中国人は家に火を付けようと、燃えている薪を部屋の中に投込んだ。姉は薪を外に投げ返し、アンペラ（竹で編んだ敷物）に燃え移った火を懸命に消した。近くに住んでいる朝鮮人の青年が二、三人、騒ぎを聞きつけて駆けつけ、暴れる中国人を押さえつけ、騒ぎは収まった。朴さんも駆けつけ、暴れた中国人と朝鮮人の四人で深夜まで話し合い、再婚話は白紙に戻して、以前通り春まで農夫の仕事

さんにいこうと思う。決して好きでいくのではありません」母は生きていくために再婚を決心した。私たちは、ただ母のあとをついていくだけだった。

昭和二十一年も十二月に入り、延社の街は凍りついた。私は羅津から持って来たリュックサックと安さんにもらった鍋と拾った鉄兜を、姉は布団一枚、我が家の全財産を持って、一列になって母の後ろに付いて行った。「達者でね！」世話になったオモニと青年が手を振って見送ってくれた。「有難う！」私たちも手を振って別れた。本当に親切な人たちだった。思えば延社の町に着いて以来、家族五人がしっかりと寄り添い、泣いたり笑ったり、恐ろしい目に遭ったりして暮らした、一年四カ月のような思い出が詰まった物置小屋である。

町のはずれにある中国人の農家まで、だれも無口であった。白頭山おろしの寒風によって、呼気でまっげも眉毛も真っ白に凍りついた。親切な中国人は、名前を朴さんという。朴さんは母と再婚

手伝いこの家に住むことになった。

#### (九) 春近し

延社に来て二度目の春の兆しが見えてきた。私たちのこれからの生活について母、姉、私の三人で相談し、姉は両班の家で女中を、私は朴さんの家で働き、母と妹は部屋を借りて住むことになり、暴力中国人には別れを告げた。暴力中国人は、ハエでも払うように「いけ！ いけ！」と手で払った。私たちはまっすぐ朴さんの家に向かった。

延社の空気も暖かくなり、畑の耕作が始まった。十四歳の少年には大変な重労働だった。食事は高粱と粟のご飯だが、ときどき豚肉にもありついた。耕作の終わった畑にはきゅうり、なすび、にんにく、カボチャ、白菜など、ほとんどの野菜の種を蒔いた。芽が出るまで休み、芽が出ると周りの土を畝って肥料の人糞をかける。きゅうり、なすびには竹で棚を作る。三日に一度井戸の水を汲み、広い畑にまんべんなくかける。一丁前の農夫少年となった。一連の農作業は夏で一応終わり、あと



は収穫を待つだけである。私は十五歳になっていた。

#### (十) 脱北の計画

朴さんは主に野菜を生産していた。私は一生懸命に働いた。収穫が終わりに、延社の空にシベリアを飛び立った三度目の雁の群れが、白頭山の方から飛んで来た。収穫が終わると、来年の準備が始まる。私は朴さんの指示を待った。「肥料を運ぶ」と朴さんは決めた。人糞運びだった。冬の間は人糞が凍りつくので、今のうちの仕事だった。朴さんと私は両天秤の桶を担いで、朝鮮人の便所の汲み取り口に回り蓋を開けた。臭気が鼻孔を刺激し、めまいを起こしそうだった。朴さんは桶に満たんにして肩に担ぎ、バランスを取りながら上手に運んだが、私は桶に半分しか入れないのに調子が合わず、桶の中でびちゃびちゃと人糞が跳ねて顔にかかった。すべての誇りを捨てた私は、感情のないロボットのようになっていた。一日、五、六回運ぶ作業が、十日ばかり続いた。人糞の臭いが体

綿がはみ出した支那服を、朴さんからもらった。その服を着て、リュックサック一つ持てば、いつでも出発OKだった。だが、私たち五人は突然延社の保安隊に拘束された。白頭山の稜線に冬の太陽が落ちて、夕方の茜色がセピア色に変わるころ、私たちは延社の駅に連行され、無蓋のトロッコに無理やり乗せられた。白頭山から吹き降ろす十二月の風は肌を刺すほど痛く、私たち五人は絶えず体を動かし、お互いに背中をさすり身を締め、氷点下三十度の寒さに耐えた。三十分もしないうちに辺りは暗くなり、夜空の星がきらきらと輝き、トロッコ列車は砕氷船のように、凍りついた空気をかき分けて東へ東へと走った。茂山駅でいったん停車し、トロッコはまた走った。突然の拘束で私たちは着の身着のまま、羅津から離さず持ってきたリュックサックも朴さんの家に置いたままであった。夜十時ころ古茂山に着いた。

#### 三 ダモイ（帰国）

#### (一) 古茂山の一日

に染みついていた。「朝鮮人のウンコは臭い。ニンニクの食べ過ぎだ！」私はつばを何回も何回も道路に吐き捨てた。

十一月に入り、収穫も終わって暇になった中国人たちが五、六人、毎晩のように集まって、皆深刻な顔で話している。話の内容は、中国語なのでよくは分からなかったが、蒋介石軍が敗退し、毛沢東の八路軍が制覇したということだった。朴さんたちは、鮮満国境を流れる豆満江が凍結したら延社を脱出し、川を歩いて渡り、自分たちの故郷満州へ行くことを計画していた。「八路軍に入らないか？」「八路軍には、お前のような日本人がたくさんいて歓迎するだろう」と勧誘されたが、私は八路軍に入隊するより勉強がしなかった。満州行きが決まり、私たちは父の墓に別れを告げに、家族五人で吹雪の中、墓参りに行った。

#### ・ 連行

十二月に入り、朴さんたちのグループは出発を待つばかりになった。私たちは、布が破れて所々

延社から古茂山まで約三時間、無蓋のトロッコは走り続け、私たち五人は極寒に骨の芯まで凍りついて、体はくたくたであった。私たちは保安隊事務所に行き、そのまま留置場に入れられ、与えられた一人一枚の毛布にくるまって、エビのようにくの字になって眠った。

寒さで目が覚めた。私たち五人は、ストーブの焚いてある事務所の長椅子の前に立っていた。大きな机の前に座っていた保安隊の隊長らしい人が、「どうぞ座って下さい」と言った。丁寧な日本語だった。「オデ、ワツシミカ（どこから来たか？）日本語を知っているのに、朝鮮語で切り出してきた。母はいつもの流ちょうな朝鮮語で、今までのいきさつを話した。「朝鮮語が大変上手ですね。長年朝鮮で暮らしていたのですね」隊長も、今度は上手な日本語で話した。「あなたたちの身柄をソ連軍に引き渡すことになりました。お母さんは日本生まれの日本人だが、子供さんたちは朝鮮生まれの朝鮮二世だから、朝鮮国のために働い

てもらいますが、どうしますか？」母は、はつきり断つた。もちろん、私たちも家族と行動を共にすることを申し出た。隊長は了解してくれて、私たちの尋問は終わった。朝食は、黒パンと野菜がたくさん入ったスープだった。

## (二) 不安な旅路

私たちの運命は、まさに激流に流される木の葉のようなもので、自分ではどうしようもなかった。私たち五人は毛布を二枚もらい、ソ連軍の将校に身柄を預けられ、古茂山の駅に連行された。駅には大勢の朝鮮人、中国人、ソ連兵がいた。列車が来ると乗客は客車に乗ったが、私たちは五、六両連結された貨車の二両に乗せられ、扉は外から錠が掛けられた。貨車の中には子牛が三頭、格子の箱に入っており、牛糞の臭いが立ちこめていた。まるで囚人だった。清津に着き、私たちは下車させられた。清津は、私たちの家がある羅津とは目と鼻の先である。何となく懐かしい匂いを感じた。私たちは、元山日本人収容所に収容されることが

分かった。

## (三) 元山収容所

清津駅から私たちはまた貨物車に乗せられ、ドアには錠が掛けられた。貨物車は家族五人の貸し切りで牛は乗っていないが、寒さは依然強く、耐えるしかなかった。

三時間ほど走って停車した城津駅で、ソ連将校から食事をもらい、一時の安息を得た。元山駅に着いたころには、日もとっぷりと暮れていた。元山は北緯三十九度にあり、氷点下二十度の世界だった。下車した私たちは、疲れ果てて駅のホームにヘタヘタと座り込んだ。ソ連兵は、黙ってそばに付いていた。ポロポロの綿入れの支那服を着ていた私たちを、駅にいた朝鮮人乗客は怪訝な目でジロジロと見ていた。

元山収容所には、在朝最期の日本人とソ連抑留の病人たちが収容されていた。元日本兵、満州開拓青少年団、一般邦人は、みんな汚れ破れた服を着てやせこけ、それでも明るく私たちを迎えてく

れた。敗戦後二年半の辛苦を、皆それぞれ歯を食いしばって耐えてきた人たちであろう。「ダモイ（帰国）ですよ！ ダモイ！ ダモイ！」収容所の日本人はダモイを連呼した。

収容所に着いて、特別の白米の握り飯を配給され一口食べたときの感激は、脳にシヨックが走つたように気が遠くなる感じだった。その日に北朝鮮の各地から連れて来られた日本人は、私たち五人を含め二十人余りであった。全員、近いうちに入港する日本の引揚船に乗船する予定になっていた、それまではこの収容所で待機するということであつた。

翌日、私たちは宿舎に入る前に、男も女も子供も、着ているものをみんな脱がされ、持ち物も一緒に一つの袋に入れさせられて、氷点下二十度の寒風の中を五十メートル、素っ裸のまま別棟の倉庫まで歩かされた。寒いというより体全体が痛いという感じで、全裸の女性たちも恥ずかしがるどころではなかった。倉庫は浴場であつた。二年六

カ月ぶりの風呂だった。お湯は瞬間に真っ黒になった。袋に入れた衣類などは、蒸気で消毒と風の全滅を図つたらしいが、完全とはいかなかった。収容所では毎日、炊事・清掃当番があり、私も使役に加わつた。マンドリン自動小銃を持ったソ連の兵士が引率した。

収容所では発疹チフスや赤痢に冒され、毎日二三人が死んでいった。当番は遺体を収容所の裏にある防空壕に運び、藎を掛けた。遺体の上に遺体が重なり、すぐカチンカチンに凍結して、まるで丸太のようだった。当番の他に、日本人同士の自警団があつた。ソ連兵から日本人の婦女子を護るために組織されたもので、特に便所の周りを警戒した。

収容所では五日に一度、お互いに慰め励ましため演芸会が催された。踊りや漫才、皆素人が舞台を作つた。「今日も暮れゆく異国の丘に、友よつらから、切なかりや。我慢だ、待ってろ、嵐が過ぎりや、帰る日もくる、春がくる」シベリア抑留者

の元軍人が作詞作曲した歌である。皆、かぶつていた戦闘帽子を打ち振り、涙を流して何度も何度も歌った。

一月も終わるころ、元山の港に日本の船が入港した。みんなが待ちに待った引揚船である。担架に乗せられて乗船する病人が多く、それに時間を取られた。そのあとを黙々と乗船する避難民の胸に去来するのは、避難の苦痛と日本に帰れるというわずかな希望だった。

#### 四 さらば！ 大地よ

船は、元山の港を汽笛を鳴らしながら緩やかに離れた。「父さん、さようなら！ 羅津の山河よ、さようなら！」乗船した満州開拓青少年や丸腰の日本兵たちは、苦難の思い出深い大陸の山に向かって破れた戦闘帽を振っていた。港のカモメたちだけが私たちを見送ってくれた。大陸で流した命の血と、悲しみと悔し涙を置いて、陸地はだんだん遠くに去り、やがて見えなくなった。船は朝鮮半島に沿って一路南下した。今私はこの大陸で、

持っていた誇りのすべてを奪われ、救いのようないボロボロの精神と栄養失調の肉体だけが残り、そして何の感情もなくうつろな目で海を眺めている敗残の少年だった。

船の甲板は広がったが、船倉は横にもなれないほど引揚者がひしめき合っていた。そして引揚者の約半数が赤痢、疫痢、発疹チフスの罹患者で、下痢下血の垂れ流しのため船内は異様な臭気が充満していた。罹患者で少しでも歩ける者は最期の誇りを失うのを恥じ、懸命に階段をよじ登って甲板に上がり、船縁で尻を出して排出する。地獄の絵図であった。祖国日本にもう少しで着ける。「みんな頑張れ！」

#### 五 無念！ 魂の帰国

朝、船の乗組員と引揚者十人ほどが船尾に集まっていた。白い布に包まれた人間大の包みが船尾から海に投げ込まれ、「ボーボーボー」と汽笛が三回、長く尾を引くように鳴らされた。初めて体験する水葬の儀式であった。お昼にも、二回の水葬

が行なわれた。元山の収容所でみんなが歌ったあの歌、「倒れちゃならない、異国の土に、たどり着くまで、その日まで」今、海に葬られた人もこの唄を懸命に歌っただろうに、運命は非情にも牙をむいて容赦なく襲いかかり、人間の無力さを自覚させようとしている。

玄界灘の荒海は、ちようど私たち難民が大陸で体験したように、引揚船を木の葉のように翻弄した。私は甲板の手すりにしっかりとすがって、さまざまくそして勇壮な荒海の光景に見とれていた。玄界灘を渡るのに丸一日かかった。やがて、引揚船は波静かな九州西海岸を航海していた。日本本土がもう目の前だというのに、「聞け！ わだつみの声」とばかりに、また弔意の汽笛が波間に消えていった。

朝夕の食事は、当番が五個の大きな鍋で雑炊を作り、私たちは各自鯛の缶詰の空き缶や飯盒の蓋などの食器を持ち、並んで配食の順番を待った。食事を盛るとき、分量が少ないなどいつも喧嘩

が始まった。栄養失調で弱った体を奮い立たせ、せつかくの雑炊をひっくり返し、殴り合いが始まった。もはや人間の誇りさえも失っていた。究極の本能は、苦しみや悲しみの奥にある生存欲だろうか。

食事は量が少ないので、三分もしないで終わってしまふ。退屈なときは、船倉で虱を潰して時間を潰した。

#### 六 祖国日本

私たちの引揚船は佐世保の湾内に入った。昭和二十三年二月初旬であった。船から見える連山は青々と緑に輝き、頬を撫でる風のさわやかさは、鮮満国境、白頭山麓の厳冬期の二月の気候とはあまりにも違った。それに、勝ち誇った朝鮮人や中国人、ソ連人の監視を受けなくともよい自由が有り難かった。下船準備が始まり、広い甲板の前方に長い行列を作った。頭から全身に白い粉を振りかけられた。虱退治のDDT噴霧である、このDDTの威力はすごかった。脱いだ下着を振るう

と、風がこぼれるように落ちた。

上陸前に検疫が行なわれた。仕切りカーテンもない甲板で、白衣を着た検疫官が五、六人机を背に腰掛けていた。検査官の前に列を作って並んだ引揚者は、順番がくると検査官の前で回れ右をしてズボンとパンツを下げ、尻を検査官の前に突き出した。検査官は、やせて骨の尖った尻の肛門にガラス棒を挿入し、検便試験管に収めるといふ動作を黙々と繰り返していた。いくら検査とはいえ、何とも屈辱的な格好に、私は人間として最後の誇りをも奪われた気がした。

「赤いリンゴに、唇寄せて、黙って見ている青い空……」船のスピーカーが、引揚者たちを慰めようと明るい歌を流しているのだから、リンゴは赤いに決まってるじゃないか！」「リンゴが青い空を黙って見てるのか？」「冗談じゃない！」「何となく腹立たしい気分がして、イライラした。

並木路子の「リンゴの歌」はむなくスピーカーから流れていた。

私たちが受けた苦難と屈辱は現実に確かにあったのに、夢だったのか？ 幻だったのか？ 頭が混乱した。日本に着いた喜びは感じられず、矛盾と怒りだけが頭を駆け巡った。

私たちは一人千円のお金をもらい、引揚者臨時駅から汽車に乗った。上野駅には、私たちのような薄汚い浮浪者がたむろしていた。上野駅で夜まで過ごし夜行列車に乗車、さらに北上して目的の仙台駅に着いたのは、昭和二十三年三月二十一日朝だった。しかし妙なことに気が付いた。日本に上陸して以来、私が使っている日本語と、日本人が使っている日本語がまるで違う。日本人が話している言葉が分からない。まるで外国に来たようだった。

あとがき

日本が戦争に負けてから、二〇〇五年で六十年になる。北朝鮮で過ごした屈辱と苦難の日々を私の人生の第一巻とすれば、戦後日本での忍耐と努力の生活は、私の人生の第二巻であった。第一巻

引揚者の収容施設まで、小さな丘を越えて歩いた。丘の道には緑の草が生い茂り、黄色の菜の花が満開だった。畑の斜面の梅の木にも花が満開で、甘いほのかな香りを漂わせていた。収容所は復員軍人、満州開拓青少年団、一般邦人に分かれており、大きな部屋に畳が敷かれ、私たちは二年六月ぶりに畳の匂いを味わい、大の字に寝転んで大きく背伸びをした。

年輩の看護婦さんが部屋に入ってきて、優しくゆつくりとした態度で話し始めた。「皆さんお帰りなさい。本当にご苦労さまでした。女性の方で中国人やソ連兵に暴行を受けられた方は、どうぞ恥ずかしがることはありません。安心して申し出てください」

戦争に負けた日本人は過酷で悲惨な運命に遭遇し、酷寒のシベリア、満州、北朝鮮で帰国の願いも叶わず力尽きて異国の「草生す屍」になった日本人、帰国の船であと一歩及ばず日本海の「水漬く屍」となった日本人は、一体何だったのであろう。

を何とか乗り切ったからこそ、苦労はしたが第二巻をすごし、第三、四巻と続いて行ける。まさに、波瀾万丈の人生だったような気がする。アジア大陸で生まれ育ち、十三歳から十五歳六カ月の思春期に他民族の中で戦禍と餓死寸前の状態を体験し、肉親を我が手で葬り、異国の地に倒れた多くの日本人の死を見聞きし、その死を悼むのである。

あの日、父を葬ったあの白頭山を望む山の斜面は、今日も夕日があの日と同じように美しく輝いているだろう。父は、毎日白頭山の稜線に沈む夕日を見ていることだろう。そして、いつの日か父の墓の前で、また避難中、力尽きて倒れ北朝鮮の土になった日本人の墓の前で、手を合わせる事ができる日がくることを念じ合掌して、この体験記録を閉じる。